

2025/10/26 「地の果てまで」 使徒1:6-11

信仰告白・生活綱領 さ158 せ621 (667)

10月最終聖日を迎えました。何もしなくても、時は過ぎてゆく、という、学生の時に先生から言われた言葉を思い出します。天を見上げて、神様の愛の心を思い起こして、与えられた命に感謝して生かされる1週間でありますように。

復興の時はいつか

気づけば、使徒言行録の講解も3回目です。早いですね。今朝のポイントは、まず「キリストの昇天」です。弟子たちは、復活された主に「イスラエルの国を建て直してくださるのは、今ですか」と尋ねました。口語訳では「復興」ですから、この教会にとっては、親しみを覚える質問だと思います。リバイバルを来させたまえ！先達の祈りに重なる熱気を覚えませう。イエス様は「そうです！」とは言われず、少し肩透かしのような返答をされました。私たちには、それがいつなのかは、開示されませんと言うのがお答えの本意なのでしょう。

むしろイエス様は、聖霊を受けて、力を受けて、地の果てまで、伝道する証しびとになるのだ、という約束を与えられました。私たちに与えられる約束も、伝道する教会である、宣教する共同体であると言うことができます。証人とは、ギリシャ語で「殉教者」をも意味するそうです。自分に重ねにくいイメージかもしれませんが、それは使徒と呼ばれるようになった、弟子たちにとっても同じだったでしょう。使徒言行録は、そんな使徒たちが奇跡を行い、福音を伝え、拡がっていったことを語っています。聖霊が降る時、私たちもまた、イエス様が目には見えなくても、御心を成し遂げるために、不思議な力が湧いてくるのです。

希望を抱いて待つ

もう一つのポイントは「キリストの再臨」です。9～11節には、4回も繰り返される言葉があります。それは「天に(を)」と言う言葉です。天高く馬肥ゆる秋、といいますが、空を見上げるだけで、なぜか私たちの心は爽やかになり、ああそうしようと、次に自分がしたいことが浮かんできたりします。

「もうおしまいだ」と涙にくれる別れではなく、「I'll be Back! (必ず帰ってくるよ)」と約束を残して「この後、素敵なプレゼントがあるから、期待していてね！」とむしろワクワクさせる別れが、イエス様の再臨の希望なのです。

使徒となった弟子たちにとって、ひと月前の同じ場所で、オリーブ山にいた時には、思いもよらない展開だったでしょう。主のご計画は、地の果てにまで、私たちを誘うのです。